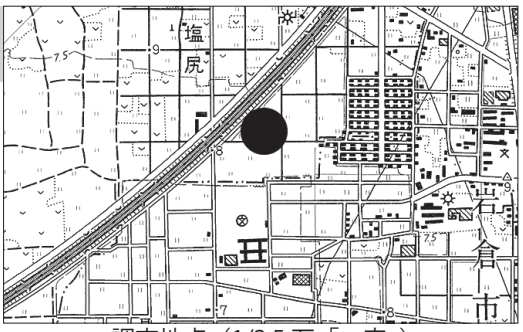
## 猫島（ねこじま）遺跡



調査地点（1/2.5 万「一宮」）

所　在　地　一宮市千秋町塩尻
調査理由　名神高速一宮パーキングエリア建設
調査期間　平成 12 年 4 月～ 8 月
調　査　積　10,500 ㎡
担　当　者　赤塚次郎・洲嵜和宏・蔭山誠一

**調査の経過**　名神高速一宮ＰＡ建設に伴い、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 11 年度より発掘調査を実施している。前年度調査で、猫島遺跡が弥生時代中期前葉から中葉にかけての環濠集落を中心に、縄文時代晩期から中世までの遺構や遺物を包含する複合遺跡であることが明らかになった。今回は前年度調査区の北側、環濠集落中央部にあたる区域を中心にＡ・Ｂの２調査区を設定し、約 10,500 ㎡を調査した。ただし、作業の都合上Ａ区を３区分し、それぞれＡａ・Ａｂ・Ａｃ区として調査した（第１図）。

**立地と環境**　前年度調査で、遺跡東側に低湿地を検出した。低湿地の中心は自然流路と推定される。遺跡は低湿地西側の標高 7.5 m前後の微高地上に展開する。微高地は氾濫原に埋没した古い自然堤防帯と考えられる。周囲 1 ㎞以内は主に水田・畠地として利用され周知の遺跡は少ないが、北東約 700 mに蕪池遺跡（弥生後期）、西南西約 800 mに三井遺跡（縄文から中世）がある。周囲 2 ㎞以内には弥生時代の集落遺跡が数多く知られている。代表的なものに大地遺跡（弥生中期・南東約 1.1 ㎞）、伝法寺野田遺跡（弥生中期・南南西約 1.4 ㎞）、元屋敷遺跡（弥生前期・南西約 1.5 ㎞）などがある（第２図）。

**調査の概要**　今回の調査で弥生時代中期の竪穴住居が 20 棟以上検出された。その中には松菊里型竪穴住居５棟も含まれる。また方形周溝墓や多数の廃棄土坑、前年度調査部分より続く環濠も検出されている。また、弥生時代後期の遺構も初めてＡｂ区でみつかった。２基の墳丘墓周溝からは山中式初期の土器が出土している。平安時代の遺構検出も目立ち、Ａａ・Ａｃ区で７棟以上の掘立柱建物と井戸が調査されている。

**弥生時代以前**　Ｂ区で前年度Ｆ区ＳＤ 01 の延長である SD29 を検出した（第３図）。幅約７ m、深さ 1.4 mで、上層には砂が厚く堆積し、最下層に腐食質・流木等を多く含む泥土が堆積する。前年度、この溝は縄文晩期頃の自然流路と推定された。今回は時期決定の決め手となる遺物は出土していない。しかし、上部砂層に弥生中期中葉の方形周溝墓がみつかり、流路の埋没がそれ以前の時期であることは確実である。

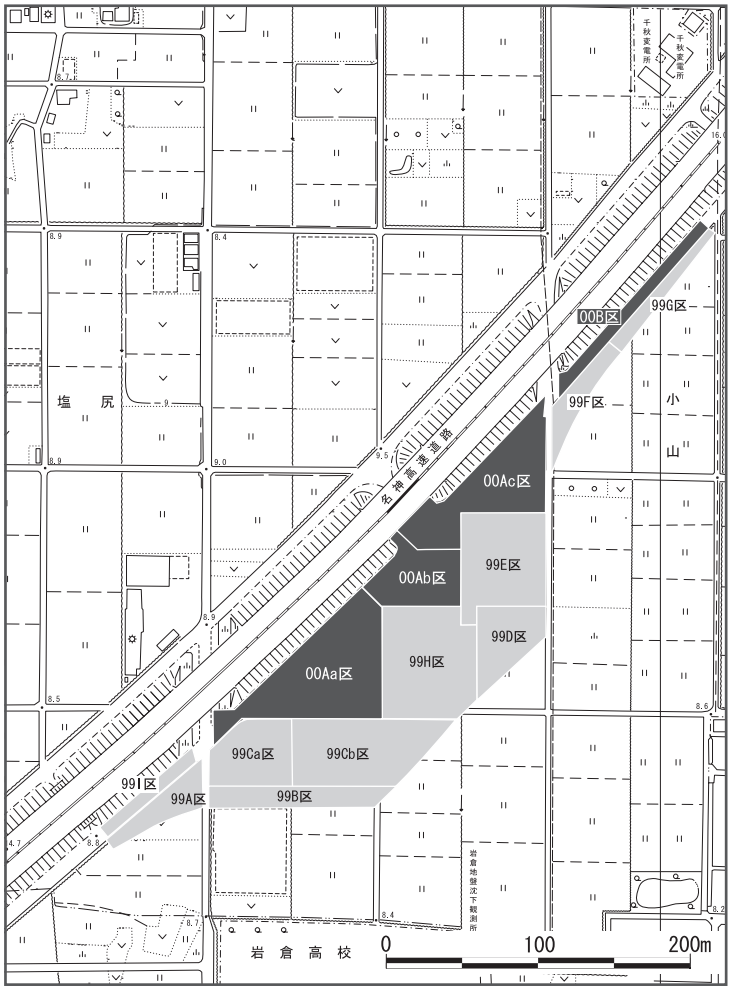
**弥生時代中期**　調査区のかなりの部分が削平を受け、良好な保存状態とはいえない状況下にあったが、弥生時代中期の竪穴住居を 20 棟余り、痕跡のみをとどめるものを含めれば 30 棟以上検出した（第５図）。特に、前年度Ｃ区から１棟検出された松菊里型竪穴住居をＡａ区で４棟、Ａｃ区で１棟調査できたのは注目に値する。平面プランと主柱穴が明確なＡａ区ＳＢ 06 を例示する。ＳＢ 06 は直径９ m弱の円形で、ほぼ八角形に並ぶ柱穴は一部重複し、周溝の重なりも観察されるので、住居の立て直しが行われたものと推定される。床面までほとんど削平されているが、柱穴は深いもので 60 ㎝以上掘り込まれている。中央土坑は長軸が 2.5

m、短軸 1.3 mの楕円形、底面はU字形で深さは 40 ㎝ある。内部に人頭大の円礫が２個置かれていた。また、Ａｃ区では環濠外部で竪穴住居群が検出された。前年度Ｅ区で外環壕から枝分かれしたＳＤ 04 が検出されていたが、これに囲まれるような居住域が形成されていた可能性もある。その他､竪穴住居に隣接して長楕円形の廃棄土坑が数多く検出されている。Ａａ区ＳＫ 126 はこうした廃棄土坑の代表例である。長軸が 4.2 m、短軸が 1.3 mの長楕円形、断面は逆台形で深さは 40 ㎝ある。埋土は黒褐色あるいは黒色で、やや多量の礫や土器類が投棄されている｡方形周溝墓はＢ区で､新しく検出された１基と前年度Ｆ区でみつかっていた３基の未調査部分が調査された。この地区の墓域は環壕集落とやや離れているため、他の墓域との時期差も予想されていたが、周溝ＳＤ 19 に貝田町式古段階の細頸壺が置かれており、時期的な隔たりは全くないことが明らかになった。

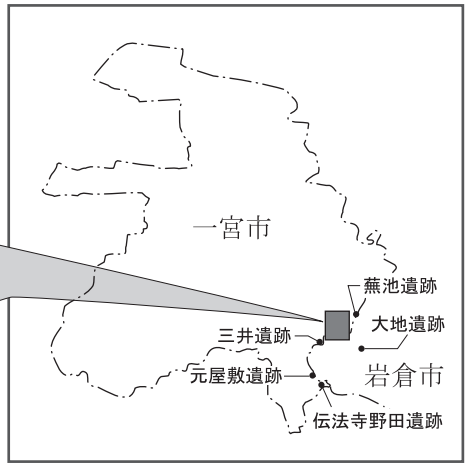
弥生時代後期　Ａｂ区で２基の墳丘墓を検出した（第４図)。周溝内に置かれていた土器はいずれも山中式初期のもので、墳丘墓も同時期の遺構と考えられる。墓は方形の墳丘をもち、墳丘南端の一角に陸橋部が設けられる。ＳＤ 42 は墳丘の一辺約 11 m、周溝の深さ約 75 ㎝、ＳＤ 38 は墳丘の一辺約８m、周溝の深さ約 60 ㎝の規模である。墳丘部には後世の遺構が重複し、主体部は残存していない。墳丘墓以外には小型高杯を出土した溝状遺構ＳＤ 45 がある。削平されてはいるが、墳丘墓周溝である可能性がある。この北側に隣接する竪穴住居ＳＢ 03 からも山中式高杯が出土しており、墓前祭が行われた施設の可能性がある。

古　代　掘立柱建物を中心に古代の遺構の発見が相次いだのも今年度の特徴である（第６図)。Ａａ区およびＡｃ区から、方形の柱穴を持つ掘立柱建物を７棟以上検出した。中でも保存の良いＡａ区ＳＢ 35 は長軸 10 m、短軸 5.5 m、５×１間、ＳＢ 37 は長軸 7.5 m、短軸５m、３×２間でいずれも東西に平行して建てられている。柱穴からは須恵器杯などが出土し、平安時代の建造物と考えられる。井戸もＡａ区から数基検出されている。ＳＫ 557 はＳＢ 35 の北方に隣接する。湧水層まで掘り抜いた上に側板を方形に組み、周囲を粘土で補強している。底部には曲げ物が設置されていた。この井戸には廃絶後多くの須恵器・灰釉陶器が投棄されている。灰釉陶器は主にＫ -90 窯式期の所産であり、井戸の廃絶時期も９世紀後半頃と推定される。竪穴住居もＡｂ・Ａｃ区から検出された。Ａｂ区ＳＢ 06 は、ＳＤ 42 墳丘部に重複する長方形の竪穴住居である。住居床面には焼土が広がり、灰釉陶器・土師器片が出土する。Ａｃ区ＳＫ 246 は長楕円形の住居でカマド状の遺構が付帯していた。ＳＫ 274 は約２m四方のほぼ正方形の池状遺構である。基盤の礫層まで掘り込まれ、周辺から数本の溝が集まる。廃絶後、灰釉陶器や礫が投棄されている。ＳＤ 61 は北東から南西にのびる溝で、Ａａ・Ａｂ区を縦断し前年度Ｂ・Ｃ・Ｅ区に連なる長大な遺構である。大部分の調査区では削平され、幅 60 ㎝、深さ 25 ㎝程度の溝に過ぎなかったが、削平を免れたＡｂ区では幅２m､深さ 80 ㎝におよぶ断面Ｖ字形のしっかりした溝であることが判明した。

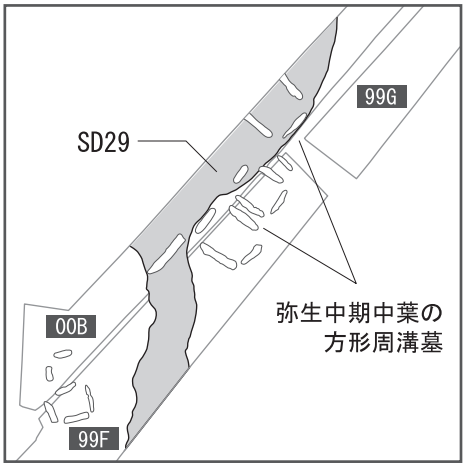
中　世　Ａａ区で灰釉系陶器を副葬した土坑墓が４基検出されている（第６図)。ＳＫ 145・146 およびＳＫ 450・461 である。またＡｂ区ＳＤ 01 はＡａ区・99 Ｈ区にまたがり、約 16 m四方の方形区画を形成する遺構である。その性格は不明だが、遺物から中世でも古い時期の遺構と推定される。（洲嵜和宏）



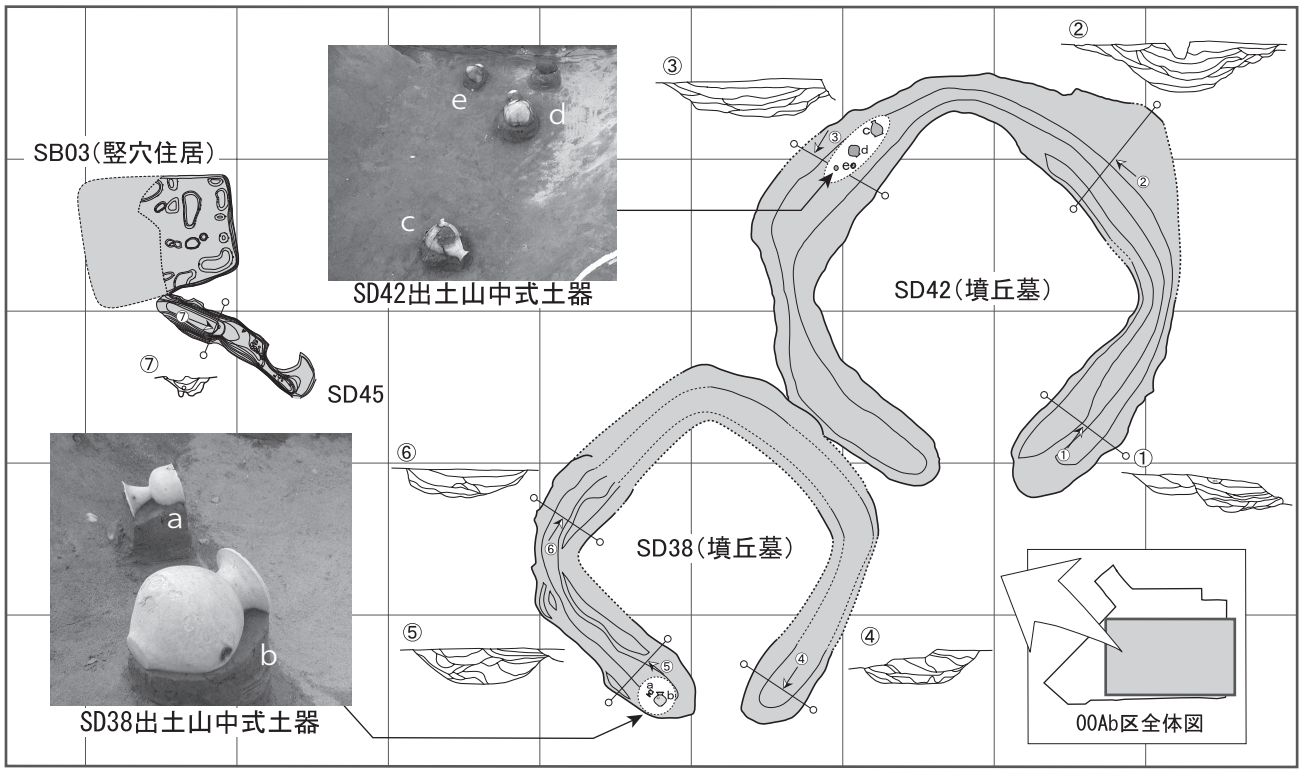

第１図　調査区配置図（1：5,000）



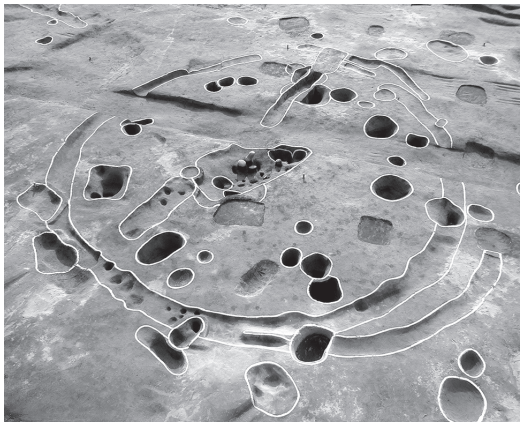

第２図　遺跡の位置と周辺遺跡




第３図　Ｂ区　旧自然流路ＳＤ 29

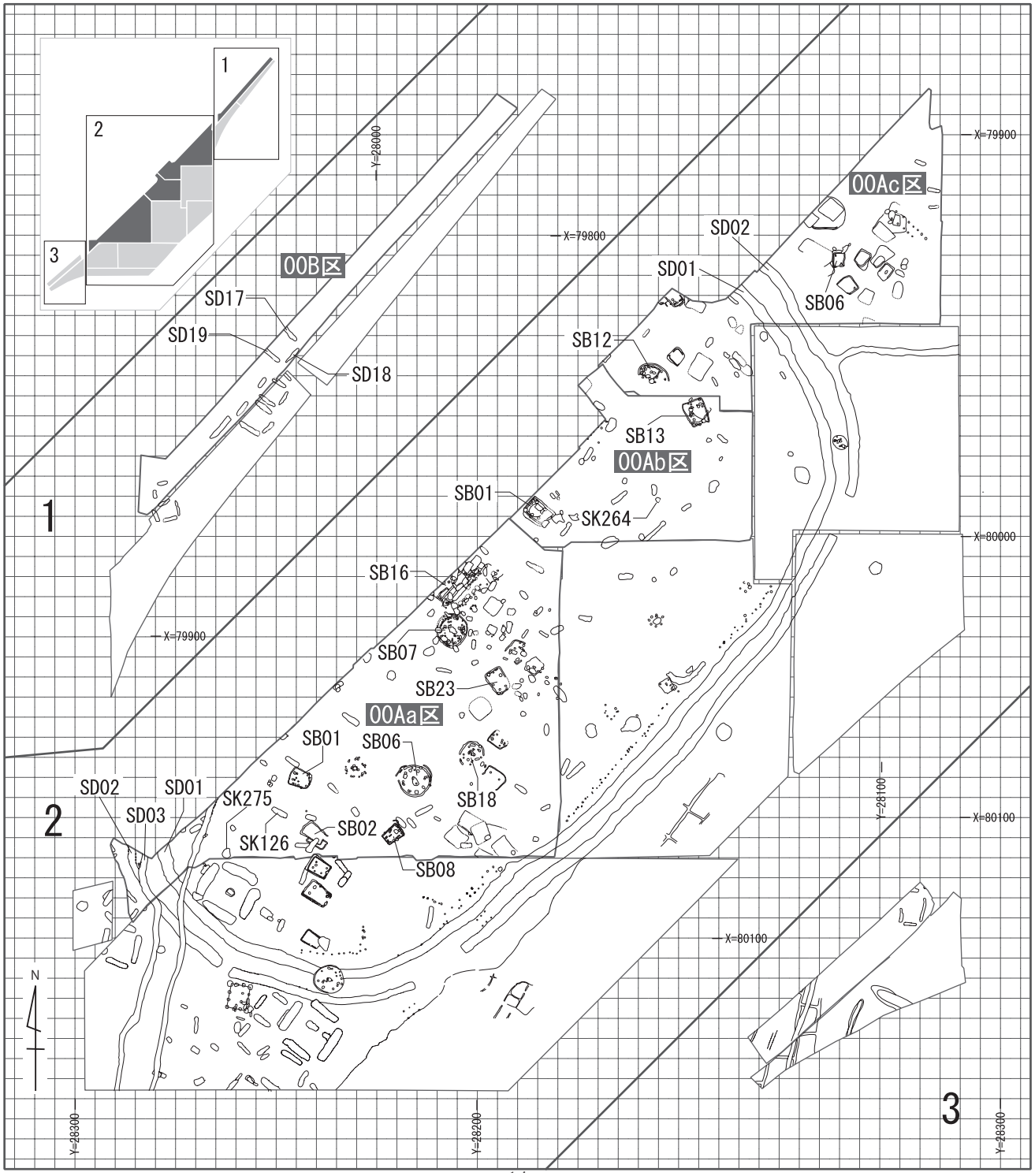



第４図　Ａｂ区　弥生時代後期の遺構（1：250）



Ａａ区　松菊里型竪穴住居ＳＢ 06

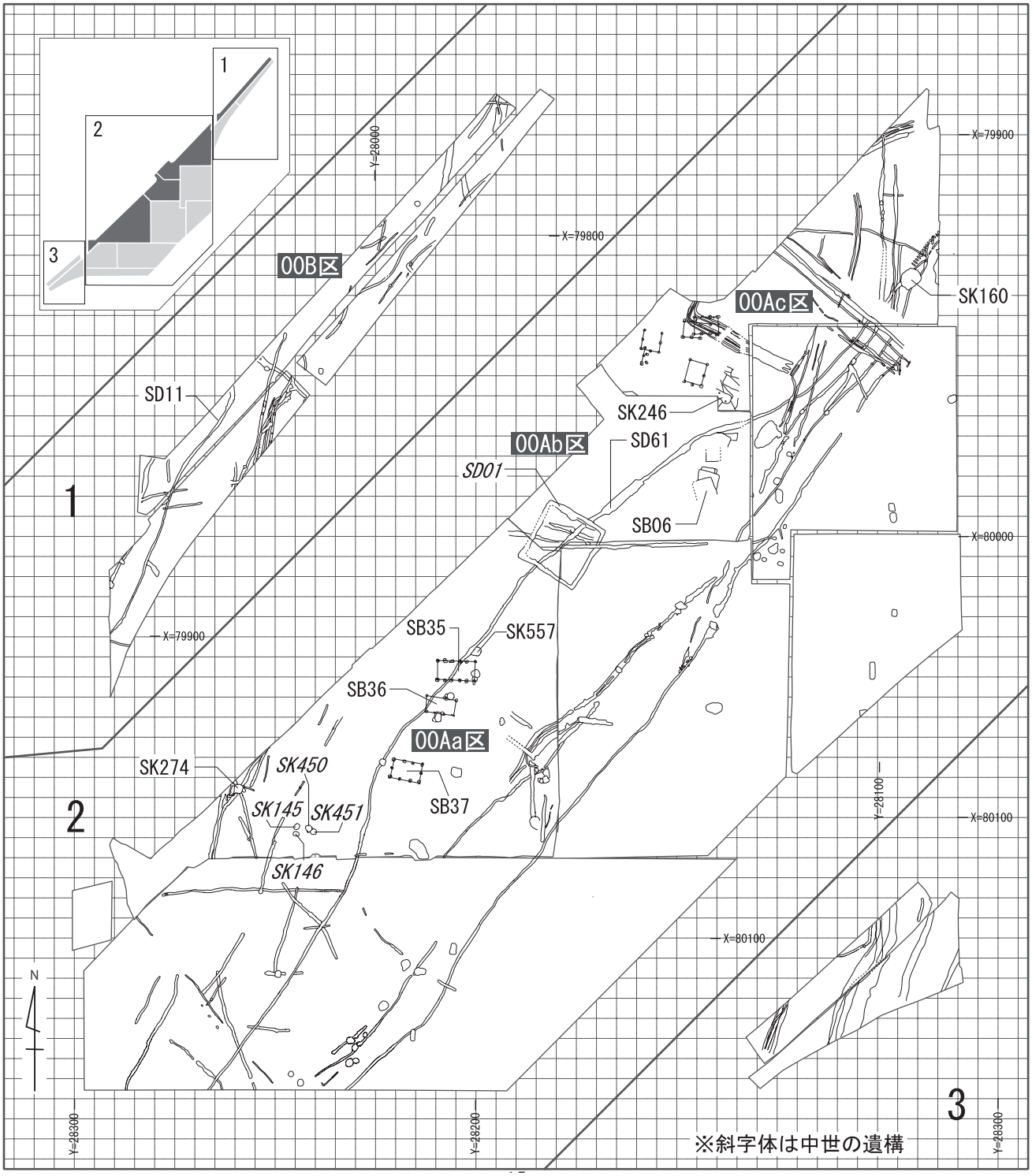
Ｂ区　ＳＤ 19（方形周溝墓）出土土器




第５図　弥生時代中期の遺構（1：2,000）

Ａａ区　平安時代掘立柱建物ＳＢ 35

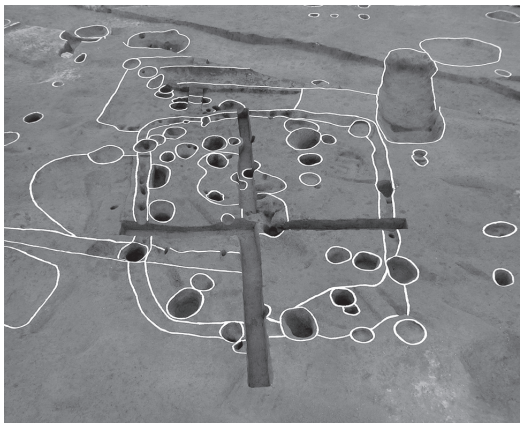
Ａａ区　平安時代井戸ＳＫ 557



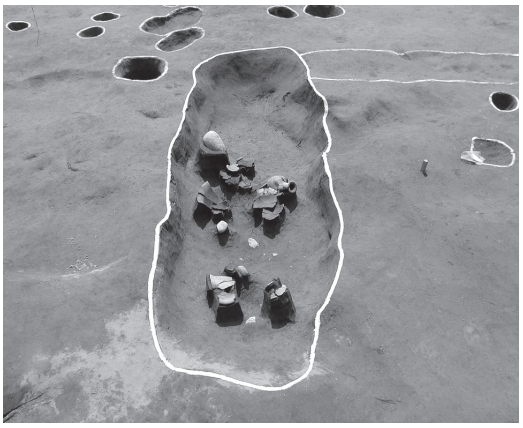

第６図　古代・中世の遺構（1：2,000）

Ｂ区　自然流路ＳＤ 29

Ａａ区　ＳＫ 275 焼土塊



Ａａ区　竪穴住居ＳＢ 01

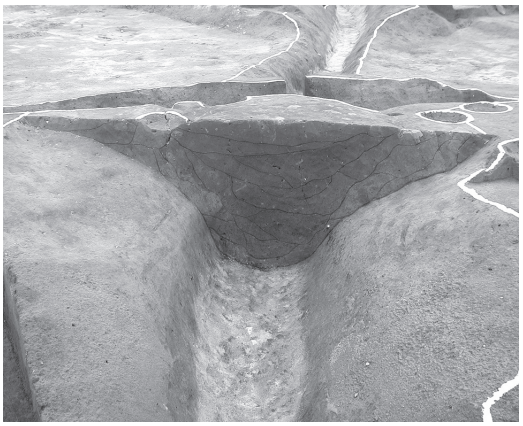


Ａａ区　廃棄土坑ＳＫ 126

Ａａ区　松菊里型竪穴住居ＳＢ 07

Ａｂ区　ＳＫ 264 出土沈線紋系土器

Ａａ区　平安時代掘立柱建物ＳＢ 37



Ａｂ区　古代溝ＳＤ 61